



TITLE:

劉基詩序說

AUTHOR(S):

福本, 雅一

CITATION:

福本, 雅一. 劉基詩序說. 中國文學報 1963, 18: 91-107

ISSUE DATE:

1963-04

URL:

<https://doi.org/10.14989/177153>

RIGHT:

劉基詩序說

福 本 雅 一

關西大學

劉基 字は伯溫、浙江省青田の人、朱元璋を佐けて明朝創建の大功臣となり、誠意伯に封ぜられ、正徳年間に至つて文成と諡された、一世の英雄である。

また、彼は開國の元勳として大きな功績を遺したばかりではなく、文章に於いても、宋濂と並んで明三百年の風氣を開き、詩に於いても、やや遅れた高啓と共に、元季纖弱の習を一洗して、明詩隆盛の基礎を築いた傑物である。

劉基は元の至大四年（一二三二）に生れ、至順四年、二十三歳で進士に及第して、有能かつ硬骨の官吏として、その疾風怒濤の人生に身を投じたのであるが、それはあたかも、

劉基詩序說（福本）

元朝が、宮廷の紊亂と官僚の腐敗によつて、次第に崩壞への道を急ぎ始めた時期と一致した。方國珍が閩浙の海上を横行して、元朝の支配に公然と叛旗を翻した至正十三年、江左の諸葛亮と稱せられた四十三歳の劉基は、行省に赴いてこの海寇の討滅を劃策したが、國珍は厚く賂して朝廷の要路を懷柔したため、彼は反つて窮地に陥り、正義がかくも利害によつて裏切られることに絶望し、憤激のあまり自殺しようとする。その後の數年、杭州・紹興を中心とした山水を放浪して、鬱勃たる霸氣を僅かに詩文に紛らせながら、雌伏の時を忍ぶ。

劉基の詩の最も早い制作年代を示すものは、「丙戌歲將赴京師途中送徐明德歸鎮江」（卷十五）と題する五律である。丙戌は即ち至正六年、彼の三十六歳にあたる。勿論早年より多くの詩作が試みられたであろうが、傳存する詩の最初の部分は、三十五歳前後から始まると見てよいであろう。この時期の作は、「北上感懷」（卷十三）のように、喪亂に流離する民の慘狀を悲しむものが多く、また「贈周宗道六

十四韻」(卷十三)のように、官吏の横暴を憤るものが特徴的である。やがて各地に大規模な叛亂が頻發するようになると、彼は元朝の臣として、廷臣たちの無能無策を口を極めて痛撃する。「感時述事十首其四」(卷十三)を見よう。

豸狗 噬禦せず

星馳して民兵を募る

民兵 盡く烏合

何を以てか干城を壯にせんや

百姓 庶しと云うと雖も

教養 素より行い無し

譬えば彼の原上の草のごとし

自から死するも還た自から生ず

安んぞ知らん 大義に殉いて

命を捐つるは父兄の爲なるを

財を利として來りて召に應ずるも

早くも懷く 逃竄の情

門を出づれば即ち剽掠し

過ぐる所 沸きて羹の如し

總戎 節制無し

顛倒して章程に迷う

威權 便嬖に付し

賞罰 公平を昧うす

饑寒すれども與に恤れむ莫く

銳挫して怨み乃ち萌す

賊を見るに多きを須いず

奔潰して土瓦傾く

旌旗 田野に委し

鳥雀 空營に噪ぐ

將軍と左右と

相い願みて目は但だ瞠す

此の事 已に習慣

智巧も能く爭う莫し

廟堂 遠算を忽せにし

胸次 猜疑并す

豈に計策の士に乏しからんや

之を用うる 至誠に非ず

德威 兩つながら立たず

何を以てか群氓を御せん

慷慨 古人を思う

惻愴として涙は纓を沾す

このような詩が壓倒的な比重を示すうちにも、同じく

「感事述事其九」のように、

回憶す 至元の初め

禁網は疎にして且つ平

家家に衣食有り

刑を畏れて保全を思う

後來 法は轉た細に

百體 皆な拘攣す

厚利は私家に入り

官府 其の愆に任ず……

と、過ぎし太平の日を追想するもの、或は「普濟寺遺懷」

(卷十六)と題する七律に

願くば聞かん 四海 兵甲を銷せんことを

早く梧桐を種えて 鳳凰を待たん

劉基詩序說(福本)

と歌うように、未來の平和を待望するものとが交錯する。

これは、彼がこの混亂もやがては過ぎゆく惡夢の時であり、まもなく昔日の秩序が甦えることを、素朴に確信している

ことを示す一例である。悲劇の時代に生れ合わせた詩人た

ちがよく呟いた、何れの日か、何れの時か……せん、とい

う空しい希望や祈念は、彼の詩に殆んど見受けられない。

彼が憔悴呻吟や、哀嘆悲辛という愛用句で、涕淚縱横にそ

の詩を結ぶ時でさえ、自棄的な絶望は感じられない。それ

は、劉基が消極的な保身に埋没してしまふには、あまりに

も行動への情熱に溢れた男であり、かつ、他日爲すあらん

とする自己の能力に、絶大な自信を抱いていたからであろ

う。鬱屈を強いられている彼のエネルギーは、どのような

不運に見舞われ、どのような不遇に虐げられようと、

孔明 魚 水を得たり

毛遂 錐 囊を脱す

霧晦うして 豹始めて變じ

海激して 鵬乃ち翔ぶ

嗟 爾獨り何爲れぞ

己を抱いて自から摧藏する

「放歌行」(卷十)

と叫びながら、自身を叱咤することをやめないのである。

しかし、元朝の官吏としての限界は自から存在する。劉

基の抱負はあくまで、この混亂をもとの秩序に回復すること——即ち元朝の支配態勢を再建することであつた。彼は

かつて自己を中華意識に燃えた革命家として考えたことはなく、ただ有爲な改革者としての能力を恃んでいたに過ぎない。このことは次の例にも明かであろう。

中夜 樓に登りて紫微を望めば、

北辰動かず 衆星依る

由來 赤日は黃道を行くも

多事にして 玄雲 白衣を變ず

雪下りて 蓬萊三島隔り

濤翻つて 滄海 萬魚飛ぶ

聖君 宵旰 惟だ己を恭しむ

早晚 陽和して 化機を幹せん

「又用韻答嚴上人」(卷十六)

それ故、劉基の詩に於いてしばしば出合うのは、創業の英雄やその輔臣ではなく、排難解紛の魯仲連であり、唐朝再造の李・郭である。

申胥 楚國を存し

仲連 秦帝を却く

此の士 則ち亡ぶと雖も

英名 千萬世

「雜詩四十一首其五」(卷十二)

磨崖に勒す可し 中興頌

努力して諸公 有唐を佐けよ

「次韻和孟伯真感興詩」(卷十六)

しかし、いかに經世濟民の大志を矜ろうとも、その時に恵まれなければ、無用の壯語に墮しかねない、すでにしばしば、光陰箭の如し、と歌つた劉基は、方國珍の一事で蹉跎し、憂悶の日々を送つていたのであるが、衰老漸く至らんとして功名未だ遂げず、空しく山野に朽ちぬとも知れぬ身の前途に對して、彼が大きな不安と焦燥に驅られていたことは、想像に難くない。「不寢」(卷十五)と題する五律に、

世を避けては商綺に慙ぢ

時を匡さんとして魯連に愧づ

徘徊して往事を懷えば

惻愴として衰年を感じず

とその懊惱を洩らす。このような久しい沈滞を餘儀なく

されていた劉基にとつて、至正十六年、四十六歳の時、浙

江の處州に鎮する石抹宜孫との邂逅は、波瀾を極めたその

生涯にあつても、最も重要な意義を持つ一轉機であつた。

この二人は忽ち肝膽相照らす交りを結び、力を協せて世の

混濁を清めんと誓つたのである。「次韻和石抹公春雨見寄」

(卷十三)に、この俊傑を識つて、初めて驥足を展ばし得る

可能性を見出した劉基の喜びを讀みとることができる。

愁陰 陽景を沴し

孟春 猶お寒に苦しむ

騰雲 巖岫に湧き

落雪 江干を蔽う

街衢 潢潦溢れ

井谷 狂瀾を生ず

劉基詩序說(福本)

誤つて疑う 蛙黽の窟

中に蛟龍の蟠まる有り

復た憂う扶桑の日

坐して黃濁の爲に漫せらるを

顧瞻して四郊を望めば

足を側して安んずるに違あらず

秦を却けて魯連を慕い

齊を存して田單を想う

玄髮 改まるに向うと雖も

壯心 終に殫る靡し

小人 苟且を務め

君子 素餐を慚づ

高牙 多壘に對し

肉食するは徒だ王官

周綱 弛むと云うと雖も

一匡するは齊桓に頼る

溝澮の盈つるに驚く莫れ

雨息まば當に自から乾くべし

しかし、この充實した時は、あまりにも早く去つた。

相二期す 各おの努力し

共に艱難の時を濟わんことを

「次韻和石抹公春日感懷」(卷十三)

と固く約した二人の交りも、八十餘首の應酬唱和の詩を遺して空しかつた。至正十九年、破竹の勢で東進する朱元璋のために、宜孫はあえなく敗死してしまつたからである。

劉基の詩約千二百首は、覆瓿集二十四卷拾遺二卷と、犁眉集四卷とに收められ、前者には約九百五十首、後者は残りの約二百三十首が数えられる。覆瓿集を元季の作、犁眉集を入明以後の作とするのは、「明史藝文志」に見えるが、この二集に時代を截然と區別することは、「列朝詩集」に述べられた錢謙益の見解に従つたものである。しかし、黃伯生の行狀には、「長子劉璉、又た遺す所の文藁五卷を集め、名づけて犁眉公集と曰う。」とあり、「覆瓿集」が元季の作に相違ないとしても、「犁眉集」が入明以後の作のみであると斷ずることは、やや躊

躇される。引用詩の卷數は、隆慶年間、何鏗の編校に成

る「誠意伯劉文成公文集二十卷」に依つた。これは現在

四部叢刊に收められているものであるが、残念なことに

「覆瓿・犁眉」の二集を混淆してしまつてゐる。本論で

は、一章は前者より、二章は後者よりの引用詩である。

なお、「列朝詩集」は兩者を別に選擇してゐる。

二

朱元璋は、金華を下し括蒼を定めると、かねて聞き及んだ劉基・宋濂・葉琛・章溢をその帷幕に招いた。數度の禮聘を拒みきれず、劉基は遂に時務十八策を提げて金陵に至る。元璋は大いに喜んで、我れ天下の爲に四先生を屈せりと誇つた。なかでも劉基の寵遇殊に厚く、國家の大事は悉く彼に咨つた。朱元璋に従うことによつて、劉基は初めて群雄の死力を盡して抗爭する渦中に身を投じ、自己の能力を存分に發揮できる狀況を獲得したと認められるのであるが、しかし、何故かこの時期を境として、彼の詩から激洩たるエネルギーが消え去つてしまふのである。

逆境に久しく呻吟した時の作は、慷慨激昂の際は勿論、
悲歎哀傷の場合にさへも、情熱のはなばなしい燃焼が感じ
られたにも拘らず、順風を得て漸く自己の經綸が實現し結
實する可能性を見出した時に、突如として、人生の無常を
悟りきつたような諦めと悲しみが、その詩の基調音となつ
てしまうのである。

多くの知識階級が、厭わしい濁世を避けて、消極的な保
身に専念しようと試みた時でさえ、彼は斷乎として安息を
拒絶し、それとの安易な妥協を否定した。時の去ること早
く、功名を樹てる機會に恵まれぬ身の不遇を悲しんで、し
ばしば、空しく古えの賢人烈士に愧づる有り、と嘆息した
劉基が、

良夜 悠悠たり

星河 天に滿つ

風は窓櫺を吹き

聲は管絃の如し

酒の飲む可き無く

寒うして眠る能わず

劉基詩序說（福本）

枯腸 飢えて鳴き
百慮 交ごも煎る

人生は一世

百年に滿たず

寤寐懷思するも

曷んぞ維れ其れ然るや

内に省るも疚しからず

聖賢に愧づる有り

「寒夜謠二首其一」（卷十）

と咄くのである。末二句、自己の行爲を反省しても疚しい
點はない、それにも拘らず聖賢に對して愧づるとは一體何
を意味するのか、彼のあらゆる努力が、その意圖と齟齬し
てしまつたことを言うのか、或はあれほどまでに自負した
その才腕が、空しく期待を裏切つたことに對する自嘲と解
すべきであらうか、いづれにせよ、この急激な心境の變化
は一驚に値いする。これは何に起因するのか。また、それ
までは、自からの能力に壓倒的な信賴を寄せて、世に伯樂
の少いのを歎いていた劉基が、

悲しい哉 荊山 玉に泣く人

但だ玉を貴ぶを知りて 身を貴はず

「長歌續短歌」(卷十)

と歌つて、ただ寶玉の眞價が世に認められないのを悲しんで、身の破滅を顧みなかつた下和に、深い同情を示しながら、この身も結局彼と同じであつた、というようなニュアンスを匂わせるのは何故か。また、それまでは、来るべき輝かしい時間に、無限の期待を抱きつづけた劉基が、

今日 復た明日

明日 能く幾何ぞ

壯心 蕭索として盡き

思念 恒に苦しみ多し

「旅興五十首其三十八」(卷十三)

というように、こんどは、めぐり来る年月に反つて嫌惡をおぼえる。また、

人生 百歳の間

苦樂 相い牽攀す

生を念い 復た死を念う

何れの時か一たび開顔せん

「旅興五十首其七」(卷十三)

と歌うのは、この世に望を失つた老人の溜め息と聞かれる。飛び去る時の速さに泣いた劉基は、年老いて、遅遅として進まぬ時の歩みに壓せられて、衰え疲れ果てたその心身は、もはや敏活な反應を呈しない。そればかりか、永遠という時の單位を以てすれば、人間の萬事は遂には空しい、というような口吻をしばしば洩らすのは何故か。

亂世が、草莽の間に崛起する英雄たちにとつて純粹な實力の抗爭場を提供することは、いづれの世にも同様であるが、この二十年にわたる元末の無秩序は、彼劉基にとつて、好ましい時ではないとは言えぬ。彼はこの狀況を積極的に利用し、運命の賭に参加することによつて、自からの能力の限界を宿命と對決させることに、生命を燃焼し盡して悔いない——そうした男であつた。元末の作を收めた「覆瓿集」には、特に樂府歌行に於いて、豐麗な色彩、怪奇な幻想、横溢するヴァイタリティが顯著に認められたが、それは、彼の内奥にあつて、搏ちあい噛みあう精神の悽慘なパ

ノラマであり、そこに、例えば代表作の「二鬼」に、我我は、不確定の未來に對して注ぎこまれた、過剰な不安と期待が交錯する壯大なカオスを見るのである。

このような劉基の情熱は、石抹宜孫の死後、たやすく消し去ることができであろうか。そのままに老い朽ちるには、四十七という年齢はあまりにも若いのではないか、こうして彼が、朱元璋の招きに、ややためらいながらも應ずることになるのは、その性格からは殆んど必然であつた。しかし、親しく朱元璋に接して、劉基は愕然とした。その中に、異様な英雄の資質を認めたからである。

微賤より身を起し、自己の力のみに信頼し、艱難辛苦に鍛えられ、あらゆる權謀術數に育まれた、冷酷かつ不屈の英雄朱元璋は、人間の情熱や能力を、いわば數量に——控え目な數量に換算できる男であつた。皇帝はその權力を守るために非人間性を強制されるという。しかし、朱元璋はすでに皇帝となる以前、このような秀れた資質を備えていた、いや、備えていたからこそ皇帝になれた、と言うべきであろう。朱元璋と劉基は、互に相手を理解し、或は畏

劉基詩序說（福本）

敬したかも知れぬ。しかし、彼等の間には、遂に血の通つた人間關係は成立しなかつた。人生意氣に感ず、功名誰か復た論ぜん、という述懷は、劉基の口からは發せられないのである。

「犁眉集」は、劉基が朱元璋に従つて以來、つまり五十以後の晩年の作を収める。集中の代表作は、恐らく「旅興五十首」の五古と斷じて異論はないであろう。「其二」に曰う。

憶う 年二三十

人の勤むる能わざるを唉う

書を誦して 歎ち萬言

筆を落して 煙雲を飛ばす

朋有り 遠く自り來り

講論して朝暉を窮む

一藝 知らざるを恥ぢ

高蹈して前聞を躡す

寧んぞ知らん 衰老有るを

耳は聾し目は熏するが如し

身世すら且つ未だ保たず

況んや敢て功勲を言わんや

ここに青春の情熱の謳歌と衰老の憂愁の嘆息が、あまりにも鮮かなコントラストで描かれているのを見る。しかしこの顯著な對比が何に原因しているのか、彼の沈黙の裏に何が隠されているのか、これを解く鍵を彼の作品に求めるのは、殆んど不可能であろう。何故なら、公表を憚る嚴しい理由が當然存在したと豫想されるから。

劉基の政治に於ける功績は、宋濂の文化に於ける功績と同じく、明帝國の國家形成に基礎を据えたものであるが、決定的に重要な役割を擔うこの二人を、二人によつて代表される文化面でのブレインを、朱元璋は完全に自己のペイスに乗せて利用した。つまり、新しい王朝建設の際にしばしば見られる、理想主義的な、人道主義的な情熱を、それ故そこに貴族的なロマンチズムを漂わせる雰囲気、朱元璋は全面的に拒絶して、庶民對官僚、その頂點に皇帝があらゆる權力を掌握して存在する——といった専制國家の誕

生に、彼等を協力させたからである。それ故、

「明祖誠意有りて、而も盡くは其の言に従わず、故に治術雜にして古ならず」「潘德興・養一齋集卷十三、

論劉誠意」

というような批判は、朱元璋の酷薄な鐵の意志を、甘く誤診したものと言うべきである。劉基が夢想していたのは、恐らくこんな暗い官僚帝國ではなかつた筈だ。君臣俱に和樂し、人民は支配者を信賴し、互に理解と同情を分かちあい、生活と文化の向上を目指す儒教道德に支えられた社會と國家を建設することこそ、彼の理想ではなかつたのか。

その出身の賤しさ故、文化と文化人にと極端なコンプレクスを抱いていた朱元璋は、理由のない憎惡と輕侮を露骨に示し、知識人を信賴せず、三十年の治世に、見るべき文化事業を持たず、文化尊重の意志を殆んど缺いたばかりか、胡惟庸の獄（洪武十三年、劉基の死後）を起してからは、頻繁な文字の獄によつて、政治批判や思想の自由を制壓しようとした。このような文化の去勢が、卑俗な能率主義によつて着實に推し進められようとするのを知つて、劉基や宋

謙は、いかに失望し、いかに屈辱を感じたことであろうか。
劉基自身、朱元璋に従つたことが、生涯の不覺であつたと
悟つた時はすでに遅かつた。彼はその後悔を次のように歌
う

青青たり 瀟湘の竹

猗猗として 寒水を被る

遊子 飛蓬の如し

佳人 千里に曠し

高きに登りて左右を望めば

但だ見る 黄塵の起るを

鳳凰 翔んで下らず

梧桐 化して枳と爲る

傷懷 道う可からず

憂念 何の時か已まん

「旅興五十首其三十五」(卷十三)

天地の間但だ黄塵茫茫として、四海を平一せんとする眞主

竟に無し、と斷言する。また、

月明かにして 棲鳥動き

劉基詩序説(福本)

月暗うして 棲鳥定まる

茅鷖 枳杞に潜み

大眼 宵鏡を掛く

皇天 萬物を生じ

一物 一性を昇えらる

遂に蓋壤の間を令て

擾擾として 爭競を事とせしむ

喧呶 日夕を窮む

豈に天聰を愚さざらんや

化工 巧なりと云うと雖も

法を爲りて 祇だ自ら病む

沈思 人を令て嗟かしむ

問わんと欲するも 誰か與に應えん

「雜詩七首其五」(卷十三)

この詩が、朱元璋の施政に對するものであるとすれば、かなり痛烈であり、このような發言が稀である故、特に注目されてよい。このように見てくると、「犁眉集」に收められた詩には、この集に序した李時勉が言うように、

「優游閑雅、興を微婉に托し、以て其の自得の趣を盡す者有るは、則ち是の編に於いて之を見る」。

と説明するのは、伏在する重要な問題を避けた、一面の見解である。「覆瓿・犁眉」兩集の間に、極めて顯著な斷層が存在することを、次のような意味で、初めて指摘したのは、恐らく錢謙益である。

「公は命世の才を負うも、有元の季に丁り、下僚に沈淪す、籌策齟齬し、時を哀しみ世を憤り、幾んど草野に自から屏れんと欲す、然れども其の幕府に在るや、石抹と艱危事を共にす、知己に遇い馳驅を效し、歌詩を作爲するに、魁壘頓挫、讀者を使得憤張興起し、奮臂して其の間にでんと欲する者の如くならしむ、聖祖に遭逢し、命を帷幄に佐け、爵を五等に列す、蔚として宗臣爲り、斯に志の大に行わるを得たりと謂う可し、乃ち其の詩を爲るや、窮を悲しみ老を嘆じ、咨嗟幽憂す、昔年飛揚硃硯の氣、漸然として存する有る無し、豈に古えの大人志士の義心苦調、旂常竹帛以て其の淺深を測量す可きに非ざる者有る乎、嗚呼、其

れ感ず可き也」。「列朝詩集甲前集、劉誠意基小傳」

「犁眉集」には、「覆瓿集」に見られた奔騰する情熱の激越な叫びは全く影をひそめ、ただ蕭條たる雨と風に、暮年の落魄を啣つ詩人の姿しか認められぬ。

雨は滄江を隠し 霧は山を隠す

鄉關迢遞として 書を寄すること難し

病來 只だ盼む 春風の到るを

擬わざりき 春風 曉に更に寒きを

「春日雜興八首其七」(卷十七)

この陰鬱な春を見よ、このような歎息の中に、我我は、朱元璋に絶望し、權力の主流をめぐつて暗闘する新しい官僚群——李善長・汪廣洋・胡惟庸等との抗爭に疲果てた劉基を想像するのである。

明史に曰う、

「基は佐けて天下を定め、事を料ること神の如し、性剛にして惡を嫉み、物と多く忤う。」「卷二二八劉基列傳」

また、

「臣は惡を嫉むこと太だ甚だし、又た繁劇に耐えず、之が爲に且つ孤なり」「同右」

と自ら告白するように、劉基の剛直は、その自負と相俟つて、周圍に不必要に多くの敵を作つたとも言えぬことはない。そして、晩年の彼の孤獨は、その高い矜持に碍げられて、最後まで内面の懊惱を露呈することを恥じた。彼の詩が常に格調を保ち、清雅な趣きを失わないのは、あらゆる憂悶を孤獨によつて濾過し、すべての哀歡を内省によつて昇華させたからに他ならない。

洪武七年（一三七五）、胡惟庸が相となるに及んで、憂憤のあまり病を發し、朱元璋をして吾が子房なり、と言わしめたこの英傑は死んだ。年六十五。

三

「元季の詩は都て辭華なり、文成（劉基）獨り高格を標し、時に杜・韓を追逐せんと欲す、故に超然として獨り勝る、允に一代の冠爲り」。「明詩別裁卷一」

劉基詩序說（福本）

元朝の詩文は、一般に纖巧卑弱と稱せられ、當時にあつてすら、それに對する反省や批判が起りつつあつた。劉基が登場したのは、文風の改革を要求する氣運が漸く熟しつつあつた時である。

劉基は、その友宋濂と、ややおくれた高啓との三人が、主張に若干の相違が認められるとはいへ、明の文學に新しい息吹をもたらし、後に續く文壇に多大の影響を與えたことは、文學史の指摘を肯定しなければならぬ。宋濂が堅實な方法によつて、正統主義への復歸に貢獻し、高啓が奔放な情熱によつて、ロマンチスムへの憧憬を歌つたのに對し、劉基は詩の規範を唐以前に求め、古朴雄厚の作風を以て、纖弱の流弊を一掃しようと試みた。

これらの三人に共通した態度は、みな現實の社會——つまり元末の長い動亂と不幸な接觸を續けることによつて得られた鋭い批判精神を身につけ、高踏的遊戲的な文學を、正しい傳統に返すために、一様に復古的な主張を抱いていたことである。復古ということは、常に典型を過去に求めることであり、過去の輝かしい成功が何ゆえ可能であつた

かを考察する場合、その主張は必然的に、詩とは何か、詩を作るとはどういうことか、という根源的な反省に遡ることを要求する。

それでは、詩の本質と不可分に關連する、詩を作るという行爲を、劉基はどのように考えていたのであろうか。彼はいくつかの詩集の序に於いて、詩は何の爲にして作れるか、という疑問を極めて素朴に提出しているのであるが、そこには、詩というものを、その發生の狀態に立ちかえつて、再確認しようとする努力が見られる。例えば

「夫れ詩は何の爲にして作れる哉、情中（こころ）に發し言に形る、國風二雅は六經に列し、美刺風戒、世教に裨（たす）有らざるは莫し。」〔照玄上人詩集序〕（卷五）

と述べているが、このように詩を、爲政者にとつて、民情を察する鏡となり、良きにつけ悪しきにつけ、一般人民にとつて、モラルへの反省となるものでなければならぬとする。これは、國運の傾くに随つて、あらゆる文化事象も衰頹の色を濃くし、文學が現實逃避のための一種の遊戲として愛せられるようになった時に、しばしばなされる規

定である。元末、久しい社會の混濁によつて、創造的な試みが、すべて無意味に感じられ、萎靡沈滯の空氣が密度を増しつつあつた時、所謂世の高士たちは、世の浮沈をよそに、花鳥風月の娛しみに自己を韜晦させていたのであるが、劉基はこのような獨善的な保身主義を許すことができなかった。

「予れ嘗つて世俗の宴集を爲すを見るに、大率聲色を以て盛禮と爲す、故に女樂具らざれば則ち主客黯然として驩無からざる莫し。」

「牡丹會詩序」（卷五）

と罵倒して、風雅の地を掃つたさまを嘆じ、

「聖人を以て軌範と爲さず、自私して以て好惡を爲すは、與に詩を言う可きこと難し。」〔王原章詩集序〕

（卷五）

と、詩を趣味乃至は遊戲の次元で論ずることを強く否定しているのである。これは、當時の江南の詩壇に君臨した楊維禎とその亜流に對する抗議であることは推測に難くない。詩は眞情より發した聲であり、その眞實さ故に尊く、

かつ世教に益ありという發想は、古典に示されて長らく説得力を保つたのであるが、この傳統的な解釋に忠實であらうとする劉基は、詩型に於いても、より古いより素朴なりズムへの愛好を、極めて明瞭にその詩集に反映している。

殊に四言古詩という古典形式に、二十二首の習作を試みているのは注目に値する。また樂府古詩を合した約五百五十首の數は、彼の全詩のほぼ半分に當る。その中でも五古の三百三十七首という數は、他のスタイルによつて作られた數を悉く壓倒する。七古が僅か四十一首であることを知れば、ここに劉基詩の最も顯著な特色が存在することは明らかである。

それでは、この五古に見られる特徴は何であらうか、それは連作に對する異常な情熱である。感懷三十一首、詠史二十一首、雜詩四十一首、旅興五十首を始めとして、五古の數を最大ならしめた理由は實にここにある。そして、その連作の殆んどが、彼の詩の中で最も秀れた結晶と認められ、多くのアンソロジーが、彼の代表作として、感懷或いは旅興の數首を採ることを忘れない。因みに「列朝詩集」

劉基詩序說（福本）

は五古の連作を殆んど網羅する。いま例として感懷「其二」及び「其二十」を挙げよう。

車を驅つて 門を出でて去れば

四顧 人を見ず

廻風 落葉を卷き

颯颯として 沙塵を帶ふ

平原 曠しく千里

莽莽として 盡く荊榛

繁華 能く幾何ぞ

憔悴して 茲の辰に及ぶ

所以に芳桂の枝

桃李の春を爭わず

雲林に耿として幽獨

霜雪と空しく相い親しむ

結髮 遠遊を事とし

逍遙 四方を觀る

天地 一に何ぞ闊き

山川 杳として茫茫

衆鳥 各おの自から飛び

喬木 空しく蒼涼たり

高きに登りて 萬里を見る

古えを懷えば 心を使って傷ましむ

佇立して浮雲を望む

安んぞ風を凌いで翔るを得ん

鍾惺の名を署する「明詩歸卷一」には評して曰う、

「英雄開創の才を懷き、亂世に處りて未だ明主に遇わず、獨往獨來、其の胸中の一段は、人に對して説く可からず、并せて之を説くに人無し、苦衷は醸して悲憤感傷の詞を成す、眞に讀むに忍びざる有り、讀みて當時乾坤に俯仰し、名世を以て自から居るの情態を想見す、題して感懷と曰うは眞に感懷也。」

人に慇懃得ない、それ故、人から推察され得ないばかりか、その推察を拒むような悲哀に懊惱し、胸中の鬱を詩に散じた詩人は、劉基ばかりではない、その立場は多少異なるといえ、魏の阮籍は容易に聯想される詩人である。

阮籍は、狡詐と奸智が競つて陷穽と破滅を用意した暗黒の時に身を全うするために、あらゆる批判を口にせず、權力から隔ることに努めた。しかし、自己を全く沈黙へ閉ぢこめてしまふには、彼はあまりにも感受性に富んでいた。「詠懷其一」に曰う、

夜中 寐ぬる能わず

起坐して鳴琴を彈ず

薄帷 明月を鑑らし

清風 我が衿を吹く

孤鴻 外野に號び

朔鳥 北林に鳴く

徘徊して將に何をか見んとする

憂思 獨り傷心す

この詩が、裏に何を隠し、何を比喩しようとしているかを議論するのは、むしろ重要ではない。阮籍の強制された時代環境が、彼に深い孤獨と憂愁をもたらし、彼が故意に、自己の優れた資性と能力を壓殺しなければならなかつた悲しみを讀みとれば足りよう。劉基は、この詩人にみなざる

高雅な悲哀に強く心を牽かれ、自からの置かれた状況を、阮籍との對比によつて意識しつづけ、常に多くの教訓と慰藉を見出した。そして、詠懷の詩型を踏襲することによつて、溢れるポエジイを凝縮し、洗練して表現することに成功したといえよう。なお、この點については、稿を更めて論ずる。

古詩と關連して、樂府にも一言觸れておかねばならぬ。

劉基の樂府は、例えば近人錢基博のように、彼の詩の中で最も高い位置を與える評價もある。(「明代文學」商務印書館七十六ページ)しかし、彼の功績は、元末より新たな流行の兆を示してきた樂府を、漢魏時代の本來の姿に復歸させた點に求められなければならない。楊維禎は、多くの樂府に新題を附して、内容に新奇な創意を試みた。朱彝尊は曰う、

「元季の楊廉夫・李季和の輩、交ごも相い唱答す、然れども多く新題を構して古體と爲す、惟だ劉誠意伯は銳意摹古し、作る所特に多し、遂に明三百年の風氣を開く。」「靜志居詩話卷二」

これに反し、劉基の樂府は、悉く舊題に依つたものであ

劉基詩序說（福本）

り、その用語、表現技巧は、漢魏を學んで、よくその精髓を消化している。そして内容に於いても、類似的構想をもちながら、時事に對する鋭い諷刺を含む點で、優れた見識を示す。「太祖實錄辯證」などを著して、明初の歴史に深い造詣を視わせる錢謙益は、「列朝詩集」に、しばしば劉基の微旨を指摘する。例えば「巫山高」や「楚妃歎」や「梁甫吟」はみな元の英宗の後、高麗の奇氏を刺すという。

今まで述べたように、劉基は、古い詩型に新しい内容を盛るといふより、内容そのものを高め、詩をその技巧によつて感歎すべきものとするのではなく、その中に歌われた眞摯な感情が呼び起す、共感や感動を尊重せねばならないと考えた。このような考えは、彼にあつて、古代への憧憬となり、詩型ばかりではなく、創作態度も漢魏以前の詩人に接近しようとする。これは、前後七子の復古主義とは直接に關連せぬにせよ、明初の詩壇が、どのような方向を指さねばならないかを、自からの作品によつて示した劉基は、來るべき趨勢を豫告する重要な位置にある詩人と言ひ得るであらう。